

アクティブラーニングを取り入れた 「日本語教育概論」の実践

堀 恵 子

1. はじめに

筆者は2016年度から2018年度にかけて、それまで江田すみれ教授が担当されていた「日本語教育概論」の講義を引き継いだ。「日本語教育概論」は日本語教員養成講座の中で、1年生か2年生が受講するという位置づけであるため、大学入学以前は科目として存在しない「日本語教育」というものに対する基礎的知識を獲得させるとともに、日本語教員を目指す学生に今後の指針を与えるという使命を担う。さらに、将来日本語教師にはならず、他の職業につく学生も受講することから、国内外における多言語・多文化との共生を視野に入れて、日本語を言語の一つとして捉え、第二言語として日本語を使用する人々に対する理解と共感を持ち、増え続ける在留外国人、外国人人材に適切に対応できるグローバルな視点を獲得させることを目的としている。

「日本語教育概論」は講義との位置づけであるが、大学での授業のあり方は大きく転換を求められており、2012年の文部科学省中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」では、「能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」と明記されている。また、筆者は日本語教育に長年携わっており、言語教育は学習者に積極的に取り組む姿勢を引き出す授業の形態で進めるものであることから、本講義を担当するにあたってもアクティブラーニングを取り入れて、学生の積極的に学ぶ姿勢を引き出したいと考え、3年にわたって取り組んだ。

本稿はそのアクティブラーニングの実践を振り返り、学生の期末レポートに表明された授業への感想を交えて、今後の授業のあり方を考察するものである。

2. アクティブラーニングとは

高等教育のあり方について、早くからジョンソンほか（2001）は古いパラダイムと新しいパラダイムを対比させた見方を示している。大学での教育とは、学生の空の器を知識で満たすために知識を伝授することではなく、知識は学生自らが主体となって構成・発見・生成すると捉え、したがって教育の目標は、学生の能力と才能を開発することであると指摘している。彼らは新旧の教育パラダイムの変化を表1のようにまとめている。

表 1 教育の新旧パラダイム比較

	古いパラダイム	新しいパラダイム
知識観	教員から学生に転移するもの	教員と学生がともに構築するもの
学生観	受身的な器(教員の知識で満たされる)	自分の知識を積極的に構成・発見・生成する主体
授業の目的	学生を分類・選別すること	学生の能力と才能を開発すること
人間関係	学生間、教員と学生の間で非人間的な関係	学生間、教員と学生の間で人間的なかわりあい
学習環境	競争的・個別的な学習	クラスでは協同学習 ⁽¹⁾
授業の前提	専門家はみな教えることができる	教えることは複雑で相当な訓練を要する

表注：ジョンソンほか（2001：18）より

古いパラダイムによる教育は日本においても一般的であった。ジョンソンほか（同前）は、教育パラダイムの変化が必要であるという認識に立って、クラスでは競争的・個別的な学習から、学生の互恵の関係に立った協同学習へと変化することで、批判的な思考スキルやメタ認知的学習手法が得られやすいと指摘している。

このようなパラダイム変化によって、学習そのものも変化を求められ、前述の2012年文科省答申にあったように、能動的な学び＝アクティブラーニングが求められている。アクティブラーニングに関して、Bonwell & Eison（1991）は一般的特徴として以下の5点を指摘している（訳は松下（2015）による）

- (1) 学生は、授業を聞く以上の関わりをしていること
- (2) 情報の伝達より学生のスキルの育成に重きが置かれていること
- (3) 学生は高次の思考（分析、総合、評価）に関わっていること
- (4) 学生は活動（例：読む、議論する、書く）に関与していること
- (5) 学生が自分自身の態度や価値観を探求することに重きが置かれていること

これらの研究を受けて、2012年文科省答申では、前述のように「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見だしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」と述べている。

さらに、21世紀型スキルとして学生に必要とされる ICT リテラシーを身に付けさせる必要がある。学生はスマートフォンの普及にしたがって、近年むしろパソコン所有率が下がっていると言われ⁽²⁾、初年次においては、学術的場面で必要な最低限のコンピュータ・リテラシーを養う必要がある。

また幸い、2017年から学内学習管理システム（LMS：Learning Management System）が一新され、学生への課題提出、収集や連絡がしやすくなった。そこでLMSを通して自律学習を促すことも以前より一層容易に取り入れることができるようになった。2012年文科省

答申資料「学修時間の日米比較」によると、1年生の1週間の学習時間は日本の他学年やアメリカの全学年と比較して少なく、ゼロ時間の学生が10%程度いることがわかる。初年次から学習習慣をつけることが、大学においてのみならず、将来にわたって学び続ける基礎となるであろう。

これら大学教育に求められる授業のあり方を総合的に考えると、教室で行う講義であっても、学生の能動的な学びを引き出すために、学生同士が協働で活動し、議論しあうことを通じて、批判的な思考力を身につけ、自らの学習についてメタ認知を働かせることができるような授業を組み立てることと、同時にICTを利用する機会を増やすことが授業のあり方として望ましいと言える。

そこで、本実践では次章に述べる目標、シラバスのもと、アクティブラーニングを取り入れた授業を行った。3章では授業実践について、4章では、学期末レポートの最後の学生の授業に対する感想の記述の分析から学生の評価を取り上げ、実践の効果を考察する。

3. 授業実践

3.1 授業の目標とシラバス

本実践の授業目標は以下の通りである。前期では概観として日本語学習をめぐる国内外の状況を理解し、自分の外国語学習観の基礎を築き、それについて他の人にわかりやすく表明することができることを目指した。到達目標の1と2が講義内容に関するものであるのに対し、到達目標3は、大学生としてのアカデミックな場面に必要とされるスキルにかかわるものである。後期は前期の学習に基づき、第二言語習得、評価、社会言語学的側面、日本語を取り巻く歴史と、より深く周辺の事柄にも対象を広げる。到達目標2は、前期と同じくアカデミックスキルにかかわるものである。

【前期】

到達目標1 日本語学習の現状、言語学、異文化コミュニケーション、日本語教育の内容、教育方法、に関する基礎知識を得る。

到達目標2 自分の居住地域における外国人の現状と外国人に対する支援について知る。

到達目標3 外国語学習の目的、意義について自分なりの意見を述べるようになる。

【後期】

到達目標1 評価、第二言語習得研究、社会と言語の関わり、日本語教育史に関する基礎知識を得る。

到達目標2 日本語教育の新たな潮流について知り、日本語教師、日本語教育の役割について自分なりの意見を述べるようになる。

テキストは、江田教授の使用したテキストを引き継ぎ、遠藤織枝編（2006）を用い、毎回授業に合わせて資料などで補った。テキストの内容は、日本語教育能力検定試験の出題範囲をカバーするものである。授業では、テキストに沿いながら、学期に一度調査発表を行っている。

表2 前期シラバス

回	内容
1	オリエンテーション 言語学習・言語教育を考える
2	第1章：日本語を学ぶ人・教える人(1)：海外編
3	第1章：日本語を学ぶ人・教える人(2)：国内編
4	第2章：言語学：なぜ言語学を学ぶのか
5	第3章：日本語教育における異文化コミュニケーション
6	第4章：何を教えるか、どう教えるか(1)：コースデザイン
7	第4章：何を教えるか、どう教えるか(2)：レベル別の指導
8	第4章：何を教えるか、どう教えるか(3)：技能別の指導 話すため・書くための指導
9	第4章：何を教えるか、どう教えるか(4)：技能別の指導 聞くため・読むための指導
10	発表：自分の居住地域における外国人居住の現状と支援について
11	発表の振り返り
12	第6章：さまざまな外国語教授法(1)：訳読法・直接法
13	第6章：さまざまな外国語教授法(2)：構造言語学に基づく教授法・コミュニケーション重視の教授法
14	第6章：さまざまな外国語教授法(3)：心理学や認知学習理論に基づく教授法
15	補足・まとめ

表3 後期シラバス

回	内容
1	オリエンテーション 第5章：どう評価するか(1)：テストとは
2	第5章どう評価するか(2)：テストと評価 評価の基礎と実際
3	第5章どう評価するか(3)：新しい評価法
4	第7章第二言語習得研究と日本語教育(1)：第二言語習得とは
5	第7章第二言語習得研究と日本語教育(2)：第二言語習得の認知過程
6	第7章第二言語習得研究と日本語教育(3)：第二言語習得理論の教室への応用①
7	第7章第二言語習得研究と日本語教育(4)：第二言語習得理論の教室への応用②
8	第8章社会とことば
9	発表：海外における日本語教育と現地レポート
10	第9章日本語教育をふりかえる—日本語教育の歴史(1)：第二次世界大戦まで
11	第9章日本語教育をふりかえる—日本語教育の歴史(2)：戦後の日本語教育
12	これからの日本語教育(1)：自律学習
13	これからの日本語教育(2)：学習支援
14	教師が学び続けるために：アクションリサーチ
15	まとめ

3.2 授業の進め方

学生の家庭での自律学習を促すことと、テキストの購読を習慣づけるため、LMSを通じて毎回予習教材を配布した。教材はテキストを読んでキーワードなどを空所補充の形で書き入れるもので、各自PC教室などを利用して印刷し、記入して授業に持参するよう指示した。

これは、テキストを予め読むことを口頭で述べてもなかなか習慣づかないことから、2016年の第4回授業から始め、以後2018年度まで継続して行った。

授業では、テキストの章ごとに話し合うグループを決め、まとまって着席させた。そして、予習教材の答え合わせをさせた。教師は正答を書き入れたスライドを用意し、学生に答えさせながら解説を加えた。授業後は、家庭での復習と休んだ学生のために、スライドや配布物はpdf文書にして、LMSのコースコンテンツにアップロードし、学期中いつでも参照できるようにした。

また、グループ活動としては、授業中に適宜テーマに沿ったディスカッションや調べ学習の分担などを協働で行わせた。

予習教材の例を図1に示す。ここでは前半で、生活者としての外国人の増加に対応するよう新たな取り組みが必要であることを述べた記事を読み、空所補充の形で内容をまとめ、その後地方自治体が独自教材を作成していることに触れ、実際の教材をLMSで閲覧できるようにした。そして後半では予め見てきた資料に基づいて、授業中にグループ活動として話し合いをさせている。

このように、LMSを利用した予習教材を授業中に活用し、それに基づくグループ活動を行うことで、家庭での学習と授業中の話し合いの両方を活発にすることができる。家庭での予習を行っていないとグループでの話し合いに積極的に参加できないため、自律学習に対する動機づけを維持するのに役立っているようである。

次節からは、本実践の授業活動における特徴的なこととして、グループ活動の進め方、学期中に課す調査発表、発表を基にした学期末レポート課題を取り上げる。

3.3 グループ活動の例

本節では、①グループ活動の例として、グループごとに異なるテーマについて調べ、クラスに報告した「教授法」の話題を、②ペア活動とグループ活動を組み合わせ例として、授業中のタクス練習を経験する例を、取り上げる。

①教授法の話題

教授法は、現在行われている教授法がどのような実践と研究の歴史の上に築かれてきたかを知り、将来日本語教師になったときに多様な学習者に対して自在にその要素を取り入れたりと、学習者の学習スタイルと調和を図ったりできるようになるために必要なことである。しかし、同時に専門用語が多く、覚えるべき事柄が多いため、筆者の経験からも情報が整理できない、覚えきれないなど、興味が持てないまま終わることが少なくない。そこで、グルー

図1 予習教材の例

日本語教育概論Ⅱ

20190121
堀恵子

外国人政策

:①「出入国管理政策」 ②「社会統合（_____）政策」

18年12月に「外国人材の受け入れ・共生のための総合的対応策」

今後必要なこと:

- ① _____ を推進する法律や担当組織、
- ②成人や児童生徒の _____ 教育の体制整備、
- ③ _____ 制度の確立、
- ④地域の _____ 活動への _____ 支援、
- ⑤共生社会を支える人作り、
- ⑥共生の意識作りや _____ 法制の整備など

1.2 地方自治体の例

・文化庁の「『生活者としての外国人』のための日本語教育事業」の示すガイドラインに沿って各地方自治体などで教材が作成されている。

<http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/seikatsusha_kyoiku_jigyo/index.html>

・教材については、「日本語教育コンテンツ共有システム」で検索できる。

<<http://www.nihongo-ews.jp/>>

大垣市の例を見よう。 資料1.2

★グループでの話し合い

この教材はどのような人に対して有効だと思いますか。

教授法の視点から見て、この教材は何を目標にしていると考えられますか

どのような教え方が考えられますか。

2. リソースの利用

学習者がアクセスできるリソースには、人的、もの、インターネットがある。

2.1 インターネットでの支援

特に、インターネット社会である現在では、いろいろなリソースが利用できる。日本語教師向けのリソースとして、先の文化庁のもののほか、いろいろなリソースがある。

- 日本語教師用 読解教材支援、文法教育支援（0604配布物）

ブによる調べ学習とし、クラスで発表する形にした。

授業では、オーディオリングル・メソッド等など教授法に関するDVDを視聴し、それぞれのメソッドについて、グループでエクセル表にまとめ、発表をさせた(表4)。エクセル表は、ほとんどの学習者にとって初めて使用するもので、一部の学生には入力に失敗するなど戸惑いもあったが、グループで相談して作成した。その後の授業では、グループの代表者に発表させ、質問も受け付けた。

表4 教授法に関するグループのタスクシート

	1 オーディオリングル・メソッド					
	手順①対話文を使った練習	②ドリルを使った練習	③実際の会話練習	教授法の特徴は？実際に見て気がついた長所	教授法の特徴は？実際に見て気がついた短所は？	授業に取り入れるとしたら、どのようなとき／何を教えるときに取り入れるか。
項目のまとめ						

②ペア・グループによるタスク練習

次に、外国語学習授業の中で行うドリルやタスクを紹介する単元で、グループやペアで実際に行わせた活動を取り上げる。図2は構造ドリルを実際に体験するための配布物である。これに従って、ペア、グループで実際にドリルを行う体験をさせた。

学生に実際に教師と学生役になって体験させることで、3年生で行う教育実習でのイメージが掴めることを期待した。どのグループも役割を交代しながら楽しそうに行う様子が見られた。活動後の学生の感想には、指示を出すタイミングが難しいというものがあった。実際に体験してこそ感じることでできる感想である。

グループでの活動のあとには、内容発表や感想を聞くことがあるが、なるべく毎回異なる学生に発言させるようにした。ただし、正確に名前をチェックするなどはしておらず、発言者を選ぶのはグループに任せた。

3.4 学期中の調査発表

毎学期1つのテーマについて調査し、発表する活動を行った。前期は学生が住む自治体の在留外国人数と、自治体の彼らに対する支援を目的とした取り組みを調査するもので、江田教授が行っていた調査発表を受け継いだものである。後期は、海外における日本語教育の現状を国際交流基金の専門家の報告などから調査し、まとめるものである。

図2 グループでのドリル練習例

2018 年度日本語教育概論1

20180528

堀恵子

(2)口頭文型練習

オーディオ・リングル法の代表的な練習法(第6章参照)

目的:① 文型/活用を正確に定着させるため

②口慣らしのため

(2)口頭文型練習の種類 グループで、TとSになって、やってみましょう。

①反復ドリル

教師が提示したものを学習者がそのまま繰り返す練習

全員のコーラス→慣れてきたら/個人の確認のため 1人で

T:読まなければなりません

S: 読まなければなりません

②問答ドリル

教師が提示した語句(キュー)を使って、質問に答える練習

T:あのかたは、どなたですか(グブタ、IMC、社員)

S: グブタさんです。IMCの社員です。

③代入ドリル

文型の一部を教師のキューに従って置き換える練習。

文の構造にしたがって、paradigmaticな関係にある語を置き換える。

T:きのう | デパート | へ行きました

S: きのうデパートへ行きました

T: 図書館

S: きのう図書館へ行きました。(同様に、{銀行}、{郵便局})

③代入ドリル

(カードによるキュー)

T:ここは | きれいな | 部屋です。(しずかな、あたたかい、など)

④変形ドリル

教師が提示したものを事前の指示に従って変形する→活用の練習に最適

その1

その2

T:て形にしてください。{読みます}

T:普通形にしてください。読みます

S:読んで

(以下同じように)

T:話します

S:話して

T:食べます

発表の仕方は、まずグループで発表を行い、その後グループから代表1名を選び、クラスの前で発表することとした。また、教師が後日クラス全員の評価を行うために、各自スマホ等を利用して録音し、LMSを通じてレジュメとともに音声アップロードさせた。

前期の学生が住む自治体の在留外国人数と、自治体の取り組みを調査する課題では、在留外国人数を調べてみて、初めてその多さ（あるいは少なさ）を意識したり、県や市の単位で国際交流協会のような団体があり、在留外国人に対する支援を様々な形で行っていることを初めて知ったという学生が多かった。日本語講座を実際に見せてもらったり、テキストを借りてきて見せたりする学生もあり、外国人支援の重要性を指摘するとともに、その貴重な活動を市の広報などを通じてもっと市民に広く知らしめるべきであると指摘した発表が多かった。

また、発表に当たってレジュメを作成させたため、図表を取り入れるなど工夫が見られた学生がいる反面、見出しを立てることや文章表現を使用することなどアカデミックな場面で必要な形式が身につけていない学生も見られた。発表後、自分のレジュメと口頭発表について振り返りをさせるとともに、教師からはクラス全体への講評とフィードバックを行った。

後期の発表では、海外で行われている日本語教育の最新の情報を集め、発表する課題を課している。これは、テキストの情報が執筆された2011年当時のものと古いのに対して、インターネットなどを利用して調査し、適切な引用表現を用いてレジュメを作成、発表させることを意図したものである。

3.5 発表を基にした学期末レポート課題

前期、後期とも、学期中のレジュメ・発表を元に、学期末にレポートを書かせることを課題とした。これは、文章表現を徐々に増やしていき、章立てなどの構成、文章表現、引用、参考文献の書き方などレポートに必要なスキルを少しずつ身につけさせる目的で行った。また、通年で受講する学生がほとんどであるため、前期レポートで問題があった点は、後期の初めにクラスでフィードバックを行った。

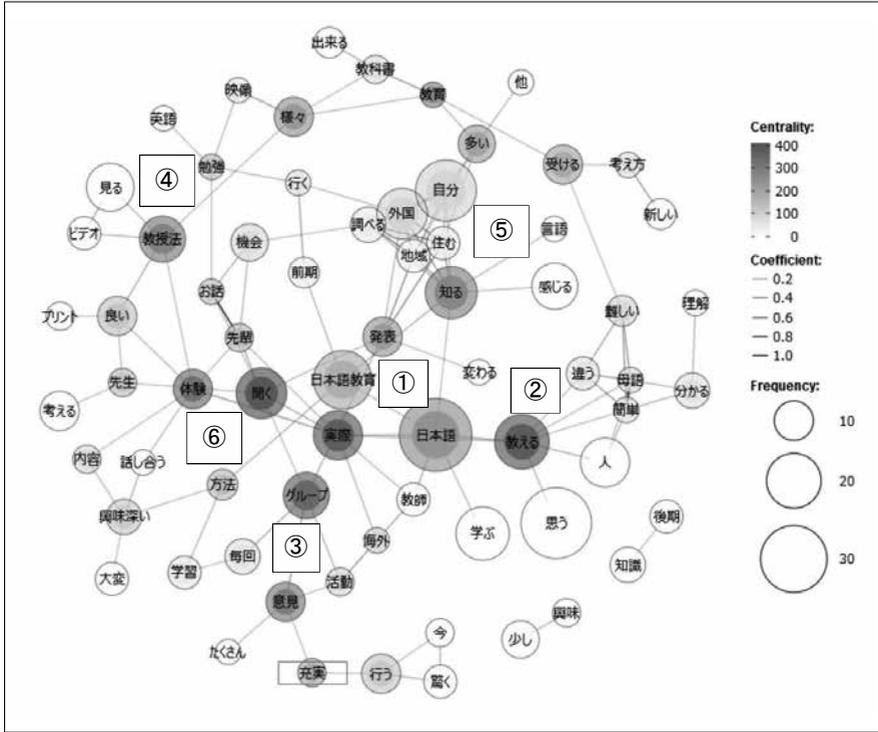
4. 学習者の振り返り

学期末レポートの末尾に授業に対する感想を書かせた。これは成績とは無関係であり、授業改善のため何でも書いてもらいたいという意図を明記した。その結果、ほぼ全員からコメントを得た。そこで、本章では前章の授業の特徴的な取り組みに対して、学生がどのように考えていたかを、学生の記述に対するテキストマイニングの手法を用いて分析する。

テキストマイニングとは、「テキスト型のデータを分析する方法」（樋口2014）で、「コンピュータによってデータの中から自動的に言葉を取り出し、さまざまな統計手法を用いた探索的な分析を行う」（同前）ものである。

分析には、KHCorder3 alpha.17dを用いた。

図3 学生の授業に対する感想の共起ネットワーク図



4.1 学生が取り上げた話題

学生がどの話題を取り上げたかに関して、共起する語のつながりから分析を行った。その結果、共起ネットワークは図3のようになった。濃い色で示した語を中心として語のつながりを示している。また、語の円の大きさは使用された頻度が高いことを示す。

図から得られた語の関連について、高い中心性を示した図中の①から⑥について順に述べる。

①「日本語」「日本語教育」

最も大きい円で表示された「日本語」「日本語教育」は、この授業のテーマであり、それに関する意見が多く聞かれたことは自然なことであろう。「実際」と共起する文としては、下記のように教授法を体験できたことを高く評価している文が見られた。(記述は学生が書いたままである)

- 授業ではパワーポイントによる講義だけではなく、実際にその教授法を体験することで、その教授法についての印象が強く残ったのが良かった。

- 外国人は日本語を勉強する実際の映像を見たりと日本語教育について、様々な体験することができました。これらのおかげで日本語教育、日本語教師についての新しい印象を持ち、詳しいことが分かりました。

②「教える」「日本語」

これまで日本語を教えるということが身近ではなかった学生が、日本語を教えるということに関して、多くの知識を学べたと評価していることがわかる。

- 自分の母語としての日本語と教える時の第二言語としての日本語はあまりに見方が違うもので、自分の普段簡単に話している言葉を何も知らない人に1から教えるのはとても難しい事なのだなど改めて思った。
- 日本語を教えるということは全く違う知識も必要だと思うけれど、教師としての教え方や学習者に対する知識を学ぶことができ、授業のたびに新たな視点を見出すことができました。

③「グループ」「意見」

「グループ」と「意見」には強いつながりが見られた。学生の文からは下記のようにグループで予習教材の答えあわせをすることや意見を出し合うことが高く評価されていることがわかる。

- グループ活動が多いことから自分の考え以外に他の意見を聞けることは良いことだと思う。さらにグループ替えがあり色々な学科の人と交流ができる。
- 授業前に印刷して持参するプリントの穴埋めの回答も、独力ではわからなかったことについてグループで意見を出し合うことで、新しい考え方に触れることができた。
- 授業ではグループを作り話し合いを行い、意見を出し合いながら学習を進めていくので毎回とても充実していた。

さらに、予習型の自律学習を促したことと、グループ活動の組み合わせがモチベーションを維持したことを指摘する記述も見られた。

- 参加型の授業で受けていてとても楽しかったです。グループでやるから「頑張ってやってこよう」と思えるし、距離が縮まって分からないところが気軽に聞くことが出来ました。

ただし、前期は毎回メンバーを替えたことについて賛否両論あった。後期は、学期の初めに学生と相談して章ごとにメンバーを替えることにした。

- この授業は、毎週グループが変わり、そのグループの人たちで考え、発表するなど、単に先生の授業を聞くだけで終わりでないところがよいと考える。(賛成)
- 希望としては、席替えの頻度をもう少し減らしてほしいということです。毎回初対面の人となるよりも何度か同じグループで活動した方が意見も出しやすいのではないかと思います。(反対)

④「教授法」

教授法については、DVD教材を見せたこと、図2に示したようにドリル練習を実際に取り入れたことなどを評価した記述が見られた。

- 授業内で見たビデオの中に出てきた教授法を班でいったいどういうものなのかということ整理してまとめてみたり、口頭文型練習などの練習法をたとえを使って実際にやってみたことが面白かった。
- ディスカッションや習った指導方法を実際にDVDで見たりするのはとても楽しく感じました。

教授法からつながる「良い」「プリント」に関しても、好評価している記述が見られた。

- プリントが、見やすい。
- 眠くならないように、先生がプリントの答えなどを聞きまわっているのがとても良いと思った。
- 前期同様、プリントの穴埋めが教科書の精読に繋がって良かった。

ただし、上記のようにプラスの受け止め方がある一方、それ以上のことを求める学生には不十分だと感じられる点もあったようである。

- 毎回の課題は大変でしたが自分の力になったと思います。ですが、予習をしっかりとやっているからこそ、授業でその内容の確認だけになってしまうととても残念に思えました。

その学生には、DVDの視聴など、他教材を取り入れていた点が好評価された。

- ディスカッションや習った指導方法を実際にDVDで見たりするのはとても楽しく感じました。

⑤「自分」「地域」「外国」「知る」

これは前期の調査発表課題について述べたものである。

- 自分の居住地域の外国人について調べた際には、自分の住んでいる市で外国人に対してどのような支援が行われているのかを知ることが出来ました。日本語教室が開かれていたり外国語対応可能な病院を設置したり、自分が今まで知らなかった事が沢山行われていて驚きました。
- 住んでいる地域の外国人居住者の支援についての発表でも、自分が住んでいる地域の外国人に対する支援は、調べて初めて知ることがほとんどであった。他の人の発表を聞いて、別の地域の政策を知ることができ、〇〇市にも取り入れれば、より外国人が住みやすくなると感じたことが多くあった。

どの学生も、3.4で述べたように、これまで知らなかった状況を身近に知ることができたこと、自分の町にもいろいろな政策を取り入れたいといった意見が見られた。この調査発表によって、学生の目を開かせることができたと感じる。

⑥「先輩」「体験」「聞く」

最後に中心傾向が見られたのは、先輩が海外で日本語教育の助手などとして体験した話を実際に聞くことができ大変興味を持ったという記述であった。

- 実際に日本語を教えるに留学した先輩の体験談を聞き、私も現地の方々とコミュニケーションをとりながら、日本語を教えたいと強く思いました。

これは、状況論的学習論（レイブ & ヴェンガー1993）で指摘されているように、先輩のことを見ながら、日本語教育という世界に入っていこうとしている学生の姿を無意識のうちに映し出しているといえるだろう。

以上、共起ネットワークから強い語のつながりを見た。学生がおおむねこの授業を前向きに捉え、授業中に行った活動や調査発表に対して高評価を下していることが明らかになった。ひとりで黙って講義を聴くときには生まれ得ないアクティブラーニングならではの、協働学習ならではのコメントが見られ、評価されていることがわかった。

これを授業の到達目標と照らし合わせてみると、前期目標の1、2、3について高い評価をしていることがわかる。しかしながら、後期の目標についての記述は際立って見られなかった。教授法や第二言語習得理論のように多くの専門用語や理論を学ばなければならないことについて、今後も努力するといった記述が見られた。

- 私も、実習に行くまでに、先ほど述べたような正しい日本語を習得したり、今よりも日本語教育についての知識を得るように、勉強しなくてはならないと思った。
- これからも、日本語教育、日本語教師についてのことを知りたいです。実際の体験や資料などを充実した授業を行ってほしいです。

ここにあげた彼らの感想文を見る限りでは、専門的な知識についてまだこれから学ぶことが多いと感じている段階のようであった。

5. まとめと今後の課題

本稿では、「日本語教育概論」の授業にアクティブラーニングと協働学習を取り入れた実践と、学生の授業の感想から学生の評価を分析した。

その結果、おおむねアクティブラーニングと協働学習は高く評価されていることが明らかになった。また、授業の方法に関しても、高評価とともに要望を書いたりしていることから、興味を持ち、身近なものと同向きに受け取られたようである。

ただし、日本語教育概論として学ばなければならない専門知識に関しては、今後も学び続ける必要があることを学生自身も感じていることが文面から見られた。

新しいパラダイムを取り入れた授業が学生の興味を引き、今後の学ぶ意欲につながるも期待できることから、今後は学生の積極的に学び続ける意欲を持たせ続け、自らの能力を開発していく支援を教師の側がし続けることと、それができているかを長期的に観察することが

必要であると考ええる。

注

- (1) ジョンソンほか (2001) は cooperation の訳語として「協同」を用いている。引用中では原著に従い、本稿の他の箇所では、collaboration の訳として「協働」を用いる。
- (2) 押切孝雄「【2018年度版】大学生の PC スマホ普及率・SNS 利活用アンケート調査結果」『カティサーク』<https://www.cuttysark.co.jp/%E3%80%902018%E5%B9%B4%E5%BA%A6%E7%89%88%E3%80%91%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E7%94%9F%E3%81%AEpc%E3%82%B9%E3%83%9E%E3%83%9B%E6%99%AE%E5%8F%8A%E7%8E%87%E3%83%BBsns%E5%88%A9%E6%B4%BB%E7%94%A8%E3%82%A2%E3%83%B3.html> (2019年10月29日閲覧)

参考文献

- 遠藤織枝編 (2006) 『日本語教育を学ぶ』第2版 三修社
- D. W. ジョンソン、R. T. ジョンソン、K. A. スミス著、関田一彦監訳 (2001) 『学生参加型の大学授業：協同学習への実践ガイド』玉川大学出版部 (David W. Johnson, Roger T. Johnson, Karl A. Smith. Active learning: cooperation in the college classroom. Interaction Book Co., c1991)
- 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版
- 松下佳代 (2015) 『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房
- Bonwell, C. C., & Eison, J. A. (1991). Active Learning: Creating Excitement in the Classroom. ASHE-ERIC Higher Education Report, Washington DC: School of Education and Human Development, George Washington University.
- Lave, J. and Wenger, E. (1991) Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation. New York: Cambridge University Press. (レイプ & ヴェンガー著 佐伯胖訳 (1993) 『状況に埋め込まれた学習— 正統的周辺参加』産業図書)